

小値賀JICA研修実施報告*

佐藤 快信**

Report of the JICA study and training in Ojika

Yoshinobu SATO

キーワード：JICA、小値賀町、国際協力、PRA、
地域開発

I 部 事業申請の概要

はじめに

この報告は、2006年度国際協力機構（JICA）の草の根事業（地元提案型）による「島嶼における自立を目指した（地域資源活用による）人づくり・地域づくり」研修事業の実施報告である。

後述のように提案をおこなった小値賀町では、これまでにJICAの研修プログラムの一部を春と秋に受け入れをおこなってきており、研修をうけた研修員の延べ人数は100名を超える。そうした実績をもとに、今回は地元で研修の全てを小値賀町でおこなうことを提案することとなった。ただし、研修員の受け入れに関しては、小値賀町と同じ島嶼国から受け入れることによって、互いが抱える課題の共有と解決への協働体制を組めることを意識した。そのため、太平洋州のフィジー、サモア、トンガと過去の研修員の受け入れで小値賀へ好影響をもたらしたと考えられたジャマイカの4カ国とした。研修期間は、9月21日の講義から始まり、10月12日の研修員の研修成果の発表会で終了した。

研修は、地域開発の手法である集落環境調査（PRA）を軸とした研修プログラムで構成されており、座学的なことをまちづくり協定を締結している長崎ウエスレヤン大学で実施し、実習を小値賀町及び属島である大島において実施することとした。また、研修全体のコーディネーションを佐藤がコースマネージャーとしておこなった。なお、次年度以降（2年間事業）も小値賀町は提案をおこない、実施される予定である。

1. 事業名：

島嶼における自立を目指した（地域資源活用による）人づくり・地域づくり
Local resource based Autonomous Development for Small Island Developing States

2. 提案自治体：長崎県北松浦郡小値賀町

3. 対象国：サモア、フィジー、トンガ、ジャマイカ

4. 所管国内機関：JICA九州

5. 日本国実施機関：長崎ウエスレヤン大学

6. 受け入れ期間：平成18年9月17日～10月14日

7. 事業実施の背景と経緯及び必要性・妥当性 （現状・問題点・対象国(地域)の選定理由等）

国が持つ権限や財源を地方公共団体に移し、地方の主権を進めていく「地方分権」というシステムが世界的に推進されているが、実施にあたっては行政効率や財政上の問題は大きく、特に小規模離島においては地域資源を積極的に活かした自立的な発展を目指す地域経営が不可欠となる。

また、島嶼は環海性、隔絶性、狭小性という地理的な要因により、外部資本注入や市場の確保が困難である。そのため、持続的な経済開発などの島嶼開発においては、島内の活性化はもとより島外との関係を図る上で島嶼の自立性（自律）は極めて重要な要因となる。

自立を目指す地域づくりと地域振興・地域自治の推進において、住民を主体とするまちづくりは有効かつ重要であり、大洋州等の島嶼国において

* Received February 28, 2007

** 長崎ウエスレヤン大学 現代社会学部 地域づくり学科, Faculty of Contemporary Social Studies, Nagasaki Wesleyan University, 1057 Eida, Isahaya, Nagasaki 854-0081, Japan

も同様といえる。その際、住民及び行政職員が自らの地域についてよく理解することや行政と住民がどのようにして連携を図るかという重要な課題がある。具体的には、地域の理解の重要性をどうやって住民自身に気づかせるかという啓発的課題と、又気づいている住民とどのようにして連携するかという運営方法の課題があげられる。

当町では、当初は行政（企画）が主体となって「地域の特性を活かした創意工夫溢れる地域づくりを推進することのできる、魅力あるニューリーダー」の育成を目的とした人材育成塾を平成9年度から継続的に実施してきている。その結果「地域の活性化の糸口を別の視点に立って見つけ、それを実行に移すことのできる人材」の育成については、徐々に成果が上がってきており、この事業に関わる行政職員や住民の意識は紆余曲折を経ながら確実に変化し、目標に向かって着実に進んでいることは確かであり、住民主体のまちづくりと自立への芽生えがみられ始めている。

ここまでの歩みの中での失敗・課題も含め、スケールは小さいが、住民主体の草の根活動に重きをおいた、当町における地域づくりのノウハウを、研修員である地域リーダーや行政官が学ぶことによって、研修員の意識が変わり、帰国後、地域自立に向けた人材育成が促進され则认为る。

また、このような事業は、ミレニアム開発目標にある、『大洋州等における小島嶼開発途上国の特別なニーズに応える』に合致しており、同様の問題を抱える日本の島嶼が持つ地域づくりのノウハウの効果的な活用と互いの情報を共有し、国際協力や交流を活発に進めることで、その問題は解決の方向へ進めることが可能である。

8. 事業の目的

当町は、国の推進する市町村合併に安易に従うことなく、小島嶼にとっては画期的な自立[律]の道を選択した。小さなこの島でも地方自治・地域振興は町民に支えられ取り組んでいる。かかる現状の中、小島嶼における住民の地域資源の認識・活用能力向上における行政の役割を理解し、その人材育成事業の企画・運営手法を習得することで、研修員が自国の地域レベルでより内発的な地域開発に取り組むことを目的とする。

又、今後互いの情報を共有し、ネットワークを構築し、事後研修（フォローアップ）についても双方向のアフター交流へとつなげる。

9. 事業終了時における達成目標

- ・ 住民が主体となって自立推進していくことの大切さを認識し、自国で応用可能なそのノウハウを習得する。
- ・ 住民参加型の協働事業を推進することによる、地域振興の活性化策についてそのノウハウを習得する。
- ・ 地域資源の活用による地域づくり [官・民] リーダー育成のノウハウを習得する。

10. 事業の活動内容と成果

活動内容

- ① 小値賀学の研修（島の概要、歴史、文化、市町村合併）
- ② 島外座学（地域づくり協定を結ぶ長崎ウエスレヤン大学において、島興し、住民参加、離島振興）
- ③ 島の地域資源理解（産業・文化・健康福祉・環境・コミュニティー）
- ④ 地域資源調査手法の実習（PRA・インタビュー）
- ⑤ 島外研修（他の離島における振興施策の事例視察（ユニークな地域、合併した離島等））

成果

- ① 住民から情報を得る手法、その情報を分析し、住民と行政の立場の違いによる視点及び価値観の共通点、相違点に気づく「目」を養う。
- ② 情報を活用、住民のニーズを的確に把握して、地域づくりや行政に反映させる手法を習得する。
- ③ まちづくりを進める上で重要なツールの1つであるPRA（参加型集落調査）の手法を理解する。

11. 事業終了後の発展性（日本国内や提案団体における地域の発展性等）

◎ 対象国および小値賀町での発展性

- ・ 研修員は自国において国または地方の行政官、又は、地域振興のリーダーとして活躍している方で、彼らは確かな知識や情報を持っている。これらと当町のような小離島におけるフィールドでの応用についての、双方向の研修はきっと認識され、さらに新たなニーズに合った取組みがなされるであろう。
- ・ 小値賀町行政は、本事業を国際協力の一つ

として研修員を受け入れるが、彼らから得られる別の角度からの小値賀評価は、今後の小値賀町行政運営に役立つものであり、それらは継続することによって、さらに国際音楽祭同様、国際色溢れる楽しい町づくりの推進にも寄与できる。

◎ 町民への波及効果

- ・ 町民等は本研修にかかわる部分は国際交流と位置付け、行政と住民及び外国人と同じテーマに参加するこの研修は、今求められている協働参画型社会の形成のヒントが掴めるようになる。また、住民はこの研修を通じて町の魅力を再発見する。

12. 過去の研修から学ぶもの（達成目標補足）

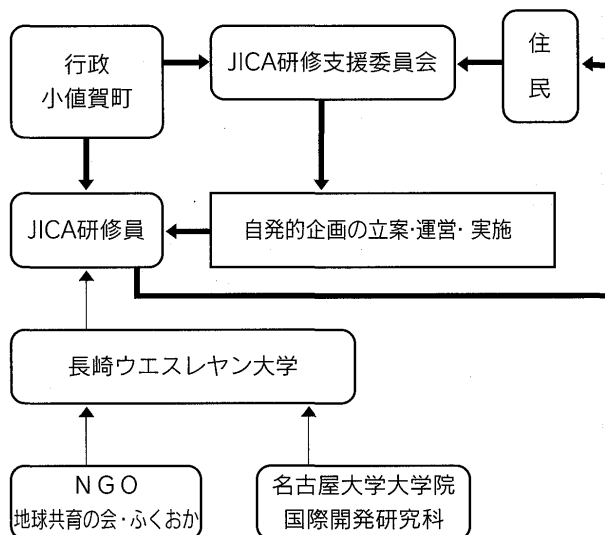
今までのJICA研修でかかわっていく中で、当町の地域資源に必ずといって興味をしめしてきた過去の研修生達、今回はこれまでの研修内容の濃度をより濃くし、さらにバージョンアップする。

これまでの研修によって、どんな素晴らしい資源を持っていたとしても、それを活かすヒトの存在が大きかったことも理解され、又それをリードする素晴らしいリーダーの必要性も説かれている。

Ⅱ 部 事業実施のための概要

1. 事業推進における行政・住民・研修員の関係性

JICA研修員の受け入れに関しての、行政・住民・研修員と事業主体の長崎ウエスレヤン大学、事業協力のNGO 地球共育の会・ふくおか、名古屋大学大学院国際開発研究課との関係は、以下のような構成で構築されている。



したがって、行政と住民はJICA研修支援委員会という場において協働し、JICA研修プログラムの企画・運営・実施をおこない、研修の結果としてJICA研修員による住民への刺激として太線で示される循環がおこなわれることで住民主体のまちづくりへの仕組みを構築しようとしている。

なお、事業主体の長崎ウエスレヤン大学と小値賀町は、2003年に包括的なまちづくり協定を締結している。

2. 研修員のプロフィール

	名 前	国 名	性別	母国における職業
1	メルティ	フィジー	男性	地域開発省 地域行政官
2	プリシラ	ジャマイカ	女性	ポートモア市評議員 会 人材・設備課長
3	シ ナ	サモア	女性	ラウサラコ社会組織 代表
4	マオバ	トンガ	女性	ババウ島知事室 一般職員（秘書）

3. 研修プログラムの構成

研修サポート	①	研修オリエンテーション
	③	(C R) カントリーレポート発表
	⑩	振り返りプログラム (中間)
	⑩	振り返りプログラム (全日程)
	④	スタッフとの交流会
	23	地域住民との交流 (町民レク)
小値賀学の研修 (島の概要、歴史、文化、市町村合併)	②	小値賀ってどんなところ? 町の概要説明
	21	島内視察
	22	歴史民俗資料館見学
島外座学 (島興し、住民参加、離島振興)	⑤	地域開発の学習(島外座学) i n ウェスレヤン大学
島の地域資源理解 (産業・文化・健康福祉・環境・コミュニティー)	⑦	斑小学校交流会
	⑧	下水道事業の現状
	⑨	農業の担い手公社見学
	⑩	育児サークル
	⑪	デイサービス体験
	⑫	小離島診療事業見学 (六島)
	⑬	野崎島自然観察体験
	⑭	大島訪問 (事前視察)
	⑮	探検隊活動説明
	⑲	漁協荷捌き体験
	⑳	郷土料理伝承・交流会
地域資源調査手法の実習 (PRA・インタビュー)	⑰	PRA座学 (地球共育の会)
	⑱	PRA (地域資源調査) の実践
	24	島の情報収集 (インタビュー)
	25	発表会準備
	26	住民への研修結果発表
島外研修 (他の離島における振興施策の事例視察)	⑥	長崎 さるく博 視察体験
	⑥	他島の地域開発の視察(島外研修) i n 壱岐市

Ⅲ部 研修プログラムの実施及び結果






1. 研修プログラム実施

(1) 研修スケジュール

日	曜	午 前	午 後	場 所
17	日	現地出発		
18	月	日本到着		
19	火	ブリーフィング		
20	水	ブリーフィング	移動（諫早へ）	諫早市
21	木	研修⑤（鈴木）	研修⑤（森）／ 研修①	長崎市
22	金	研修⑥（長崎市 さるく博の視察）		諫早市
23	土	研修③／研修⑤（西川）	移動（佐世保へ）	諫早市
24	日	移動（小値賀へ）	中高体育祭／研修21島内視察	小値賀
25	月	挨拶回り／研修②町概要	研修②町概要／研修④スタッフ交流	小値賀
26	火	研修⑦斑小学校交流会	研修⑧（／研修⑨）	小値賀
27	水	研修⑩育児サークル	研修⑪デイサービス体験	小値賀
28	木	研修22歴史民俗資料館見学	研修⑫小離島診療見学（六島） 研修⑬自然体験（野崎島）	六島 野崎島
29	金	移動（野崎島から笛吹へ）	研修⑭大島事前視察	大島
30	土	研修⑮探検隊説明	研修⑯振り返り（中間）	小値賀
1	日	研修23町民レクレーションに参加		小値賀
2	月	移動（佐世保・博多經由杵岐へ）		杵岐市
3	火	研修⑯杵岐島の視察		杵岐市
4	水	移動（博多へ）	休日	福岡市
5	木	移動（佐世保へ）		福岡市
6	金	フェリー欠航のため博多へ移動	研修⑰PRA座学／移動（小値賀へ）	福岡市
7	土	休憩	研修⑰PRA座学	小値賀
8	日	研修⑱PRA実習（研修員のみ）		大島
9	月	研修⑱PRA実習（大島町民と）	移動（笛吹へ）	大島
10	火	研修⑲漁協視察／研修4郷土料理	研修24インタビュー	小値賀
11	水	研修25研修結果の発表準備	／研修26研修結果の発表	小値賀
12	木	研修⑲振り返り（全日程）	挨拶回り	小値賀
13	金	移動（JICA九州へ）		
14	土	日本出発		

※9月23日、10月5日の移動において、台風の影響でフェリー欠航があった。

(2) 研修風景

日	研 修 風 景		
21			
22			
23			
24			
25			
26			
27			

28			
29			
30			
3			
6			
7			
8			

9			
10			
11			
12			

2. 研修の結果

(1) PRA実習後の振り返り

① 研修員、コースマネジャー、小値賀町職員による振り返り

<研修員の実習後の感想>

研修員	コメント概要
メルティ	グループの行動をコントロールすることが難しかった。具体的には、長老の発言力が大きく、グループの各メンバーの意見を共有することが難しかった。特に、男性と女性では、その発言力は男性のほうが強く、女性の意見を尊重するのが難しい。それは、文化的背景があると思う。
シナ	ファシリテーターは、外交官的な能力が求められると思った。発言の強い人だけに集中しないように、しかも気分を害さないように、他の人たちの意見を尊重する能力が必要と思った。
マオバ	一人一人を大事にすること。一人一人が知っていることが大事。
プリシラ	意見が出てくるまで、待つこと。調査で歩いているときは参加うまくできなかった人が、発表の準備をしているとき、参加しているのを見て、自発的に参加するのを待つことが大事で、それを促すことも大事。

<小値賀職員のコメント>

- ・今回の大島で実習を実施するにあたって、説明のため大島を4回訪れ、説明した。そして、大島での支援委員会を立ち上げた。そのなかでの課題は、参加者は何人になるか、参加者にどう理解してもらうか、子ども達の夢をどう表現するのか、ホームステイ先をどう決めるかがあった。それを解決していくためには、住民との信頼関係を如何に作っていくかをカマル氏のワークショップに参加して認識したから、それを築くことが解決することになると思った。

<コースマネージャーのコメント>

- 言葉の問題を克服しながら、よくがんばっていた。
- シナ、メルティは、発言をひとりに集中しないように気を使い、気分を害さないように発言を広げていたことは、評価できる。また、マオパ、プリシラも、一人一人の意見を聞こうと声をかけながらしていて、評価できる。
- 良いところを見つけること。改善点を見つけ、具体的に改善することを考え、次に活かすこと。

<PRAをより効果的に実施するための学習として>

Q：意見をもっと出やすい、共有できるようにする為には、今回のどの部分を改善すれば良いと思うか。

メ：時間をかければ、良いと思う。

Q：確かに時間をもう少し使えば、良かったでしょう。では、時間に制限がある場合は、どうするか？

プ：人数を少なくする？

佐藤：確かに、その方法が良いでしょう。ということは、参加者数によってグループの構成要員の人数を少なくすることによって、発言の機会が増えて、良いです。また、グループを分けていく場合、ファシリテータ同士でワークショップの成果目標を確認し、その手法の選択についても情報を共有しておく必要がある。

Q：雨が降った場合、どうしようか？

シ：それでも外に出てする。

Q：外に出ないで、ワークショップをするとどんなことができるかに絞って考えてみよう。

プ：年齢や性別に分けて、ディスカッションさせ、それぞれのグループの思い出を出やすくしてみる。

佐藤：ディスカッションもいいけれど、皆は吉野先生から、地域の地図を書くことを教えてもらったのだから、それを応用し、話すだけでなく、地図として表現して方が効果的です。また、性別を分けてすることは、女性の意見が出やすい条件を作ることになって良いと思う。さらに、発表で年齢による違いや共通性を認識することは、時間的な繋がりを認識しやすくなると思う。

②PRA実習を担当した地球共育の会・ふくおかの振り返り良かった点：

- 大島の規模がちょうど良かった。
- 大島の特性（自立の精神／農業／漁業）
- たくさんの島民の方達の参加

改善点：

- 大島の人たちの本当の気持ちを考えて実施できていたか？
- 町内会長等に、大島の概要を説明してもらうべきだった。
(時間的に時間がなければ、ペーパーを準備すべき。人口、世帯数や子どものいる家庭数など、最後まで正確なデータが得られなかった。)
- 大島の人たちへの「研修のねらい」の伝え方は工夫が必要。
- トランセクトワークの際、1グループの人数が多かった。
- なぜ、大島で実施するのか、スタッフ間での共通認識が必要。
- 最終的な目標をどこに持っていくのか。
 - ◇ 島民の力関係の把握ができていない中で、どこまでファシリテーションを研修員に求めるか。
 - ◇ 研修員の経験などを見極めたうえで、途中の目標設定の変更があっても良かったかもしれない。
 - ◇ 大島の人が大島の良さを認識している状況の中で、もう一ひねりの工夫が必要。

(2) 研修員の研修全体についての振り返り

〈Sina〉

Lessons learnt from this trip.

My perception of Japan as a whole prior to coming on this trip was that it was a country with a high standard of living, a fast paced life style and that which greatly advanced in science and technology.

These impressions I had of Japan soon changed when I landed on Ojika - a place where I found that despite other bigger parts of Japan being busy, life on Ojika is quite similar to Samoa.

The place is peaceful and the people are warm and friendly.

Secondly, I was quite impressed with the way the people managed and cared for their resources - be it land they live and grow their crops on, the facilities they use are immediately cleaned or tidied up after they have been used, money is not all that important when communities are small like Oshima and small communities can be seen as self reliant, independent and be made to be proud of the things they have and grow despite being remote like our island nations in the Pacific.

On the technical side of things, I have learnt through some of the lectures of the different methods and techniques remote rural communities in different parts of the world are taught or use to take action for the betterment of themselves and their communities.

I may try out some of the ideas I have gained from the places I have visited and the things I have seen when I get home so as to try and help my own people but I know I will never forget the warmth and hospitality I have received from the people of Ojika and hope to return some day soon.

〈Maopa〉

Lessons Learnt

- 1 . People have pride and promote their locally grown and products.
- 2 . Like the idea of the setting up of a network of former Ojika residents living outside Ojika to promote Ojika products.
- 3 . Like the idea of self reliance - don't rely on the government or other people but rely on yourselves

to do things for yourselves.

- 4 . Like programs encouraging the participation of the elderly in children's activities.

How to apply knowledge and experience when I go back to Tonga.

My current job in Tonga island to assist our island's governor with budgeting and planning. My job requires me to collect information of what is needed in the rural communities from all the town offices on Vavau. From this information, we then plan and budget for the following year's activities / what they need. I have been doing this for 12 years and have decided that when I return home, I would like to work more closely with the people in the rural communities and will request to our governor to transfer me to the section that deals with rural development as I am now interested in working out in the field.

Thank you.

〈Meleti〉

Lessons learnt

- 1 . Use of local resources to help an island population sustain itself e.g., fishing and agriculture.
- 2 . That the ideas / concerns of all strata of an island society is important for the success of any project.
- 3 . That when people do projects themselves and do not rely on government, there is a strong sense of ownership eg, Love Road on Oshima Island.
- 4 . Involvement of youth in development (Successors Group)
- 5 . That the people themselves are the best resource - they themselves know their own history, their land and their waters.
- 6 . Time management and proper planning.

Application in Fiji upon returning home

- 1 . Present training report to Minister and Chief Executive officer concerned who can influence policy changes to suit island development.
- 2 . Work closely with counterparts from line ministries like Agriculture and Fisheries to map out new strategies and to source funds.
- 3 . Pilot project - what I have learnt on one of the small islands.
- 4 . Circulate reports to other provincial administrators.

〈Pricilla〉

What I have learned from the Course

The lessons learned from this Course are many and varied., however, I have selected the three most important for elaboration. They include the following :

Concept of Participatory Rural Appraisal

Firstly, I was introduced to the concept of ‘Participatory Rural Appraisal’ (PRA), which formed the basis of this Course and which to me was most important as it sought to distinguish between so-called participatory approaches which involve partial involvement of the views and input of local residents, as opposed to the integral participation of residents in all stages of development initiatives.

The Bottom - Up Approach

Secondly, I have come to realize the importance of using ‘the bottom - up approach’ , as opposed to the top - down approach, in the decision - making process. This basically involves the full involvement of the local residents, in all stages of rather than depending on government or the policy makers to dictate to them.

Recognition, Appreciation and Utilization of Local Resources

Thirdly, I have learned the important of recognizing and having an appreciation for the local resources, both natural and human, as both have the potential to create employment opportunities for local residents which could in turn lead to development, it terms of job opportunities.

How will I apply what I have learned from the Course

When I return to my county, Jamaica, I will seek to reinforce the concept of participatory development to my workplace, the Portmore Municipal Council which, is an arm of local government in Jamaica. I also intend to assist in carrying out the ‘Participatory Rural Appraisal’ exercise in select communities, mainly those which have physical and natural resources such as a historical sites and beaches caves respectively, which are not being utilized to the fullest and which have the potential for cultural heritage tourism which can create job employment opportunities, as well as diversified the economy of Portmore.

(3) コースマネージャーとしての振り返り

① コースマネージャーとしての3つの視点

(研修員にとって)

- (ア) 如何に地域開発の手法のPRAを理解させられるか?
- (イ) 住民主体の重要性を理解させられるか?
- (ウ) 地域リーダーとして自ら実践できるか?
- (エ) 協働の意味を理解できるか?

(小値賀町にとって)

- (ア) JICA研修によって、住民の意識を変えることができるか?
- (イ) 誇りを持たせられるか?
- (ウ) 自ら企画・実践ができるようにするか?

(マネージャーにとって)

- (ア) 研修プログラムの完成度をどう高めるか?
- (イ) 研修の効率性、理解度のアップ
- (ウ) 上記の2つを満たす最適なカリキュラムの編成
- (エ) 小値賀の住民との協働による地域開発ができるか?
- (オ) 複数のグループまたは個人による協働で実施すること

② 研修プログラムに関して

- ◇ 研修スケジュールに関して、余裕がなかった。
- ◇ 研修場所が複数あるため、移動があり、そのため天候がスケジュールに影響を与えた。
- ◇ 研修プログラム数が、多すぎた。
- ◇ 以上のことによって、研修員自身の各研修プログラムの振り返りが十分でなかった。
- ◇ PRA実習では、スタッフが多く、十分に機能が果たせなかった。
- ◇ 研修プログラムの繋がりを研修員が十分把握できていなかった。
- ◇ 研修員に住民参加型の地域開発の重要性は認識してもらえたが、母国で自ら実践していくだけのスキルを与えられたかどうか不安である。

③ 受け入れに関して

- ◇ 本研修に関しての情報が現地での募集時に十分伝わっていなかったことが、研修員のコメントでわかった。
- ◇ 具体的研修内容の資料をサブ資料として、募集の際に提供すべきとされた。

④ 小値賀町への影響について

- ◇ 研修実施委員会の設置という、具体的に町民を巻き込んだ事業が開始できた。しかし、受け入れの意義や認識はまだ十分ではない。
- ◇ P R A実習地である大島島民から受け入れてよかったと感想をもらっている。しかし、島民自身が自ら計画を企画・実行するという段階にはならなかった。

(4) 今後の展望

- ・ 3年間続け、各国で3人がこの研修の卒業生を出し、ネットワークを作って欲しい。
- ・ 参加した国同士でのネットワークを作って欲しい。
- ・ 研修生が小値賀に来るのではなく、小値賀町の人がそれぞれの国で研修プログラムを実施したい。
- ・ 研修先は、参加国を年毎に変え、そこに他の参加国の人が研修に来る形態をとりたい。
- ・ そのために、小値賀町でP R A研修が教えられる人材を育成したい。

謝 辞

本研修プログラムの実施にあたっては、受け入れ自治体である小値賀町の町長をはじめとする行政職員及び町民の方々の献身的なサポートがありましたこと、NGO 地球共育の会・ふくおか（代表 吉野あかね）、名古屋大学大学院国際開発研究科（助教授 西川芳昭）のご協力がありましたことに感謝の意を表するものです。また、J I C A関係者の方々のサポートにも深く感謝の意を表するものです。